

励まされた一通の手紙、かつての教え子との交流

北東アジアの非核化への道

望田幸男

過日、かつての教え子（高校教師）が病氣見舞いに来た。その折、平和授業をやっているが、平和への確信を語りええない「もどかしさ」「無力感」を感じているといった。そこで北東アジア非核地帯条約―南北朝鮮と日本の三政府が、自分たちは核兵器をもたないかわりに、米中ロなどに北東アジアで「核兵器の不使用」（禁止ではない）を約束させる―という方法があることを話した。彼は「それは現実的ですね」と笑顔になった。

それから数日後、彼から便りがあった。そのなかに「（先生の意見を書いてある京都民報の記事※）あれは好評で、生徒からも社会科教員からもたくさんの声をいただきました。先生、手ごたえあります。」彼が平和への確信をとりもどしつつある様子がうかがわれた。

非核の会京都として「北東アジア非核地帯条約」論を提唱して、もう10年になる。だが反響・反応のいぶさに、いさかたじろぎを覚える今日この頃であったが、現下の情勢のもとで、かつての教え子のこの一文に、あらためて「この道をいく、ただ一筋に」と決意した次第である。

（本会常任世話人会代表）

※当会ホームページに掲載 <http://hikaku-kyoto.la.cocacn.jp/>